

# 成人ぜんそく温めて緩和

## 電極で加熱、気道広げる新治療

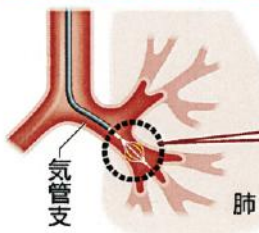
大人になってから発症することもある成人ぜんそく。電極付きのカテーテルを使い、炎症で狭くなった気道を温めて症状を和らげる新たな治療法が登場した。発作の兆候をつかむため、日々の状態を記録することも大切だ。

### 痛みなし発作「半減」

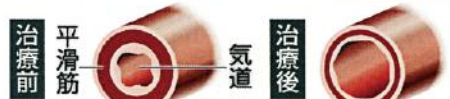
堺市の会社員、猪尾浩さん(49)は子どものころから気管支ぜんそくで、小学校も休みがちだった。大人になってから発作は減ったが、睡眠中や仕事中に急にゼーゼーと苦しくなり、入院することもあった。

昨年4月、「気管支サームプラステイ」という新しい治療法を知り、近畿大病院(大阪府大阪狭山市)で治療を受けた。ぜんそく患者は、慢性的な炎症で平滑筋という気管支の筋肉が厚くなり、気道が狭い。

#### 成人ぜんそくの新しい治療



気管支鏡を口から入れ、先端の電極で気管支の内側を65度で10秒間温める

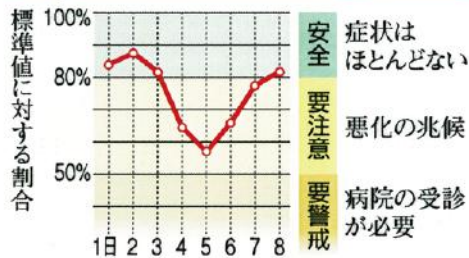


治療前 平滑筋が厚く、気道が狭い  
治療後 温めると平滑筋は薄くなり、気道が広がる

#### 発作の兆候をつかむ



息を吹き、気道の状態を知る  
↓  
日記に記入



猪尾さんは治療後2カ月で発作は減り、肺活量が安定した。「40年近くしんどかったぜんそくを忘れるほど楽になった」と話す。ぜんそくは空気が通る気道が急に狭くなり呼吸しにくくなる。国内の患者数は推計1千万人。成人ぜんそくは40〜60代で発症することが多い。原因物質が特定できず、慢性化しやすい。通常の治療は気道の炎症を抑える吸入ステロイド薬で発作を予防するのが柱だ。発作時に気道を広げる薬を併用し、多くは症状を抑えられるが、患者の約1割は重症化するという。

### 発作前兆把握も重要

一方、炎症が進んで気道が狭い患者は、器具の挿入自体が刺激になり症状が悪化する恐れがあり、治療は難しい。治療の可否は専門医が判断するよう日本呼吸器学会などが求めている。

新しい治療法は、こうした治療でも発作が続く18歳以上の重症患者が対象。昨年4月に公的医療保険が適用され、高額療養費制度を使えば、自己負担は入院費も含めて平均約17万円。全国80医療機関でこれまで約200人が治療を受けた。近畿大病院の東田有智病院長(呼吸器・アレルギー内科)は「根治治療ではないが、激しい発作を防いだり、体への負担が大きい経口ステロイド薬を減らせた」と話す。患者約560人を対象にした製薬企業などの調査(2013年)によると、「医師の指示なく自己判断で減薬や薬の中断をした」と答えた人が半数を超えた。大阪市立大の浅井一久講師(呼吸器内科)は「発作はなくても炎症は続いており、収縮した気管支が元に戻らなくなってしまう。患者が体調を自己管理することが大切」と強調する。有効なのが「ピークフローメーター」と呼ぶ筒状の器具。息の流れる速度を測定し、気道の詰まり具合を把握する。数値が低いほど発作が起りやすいため、自覚症状がなくても発作の前兆をつかめる。数千円程度で手に入る。東京都の清原保さん(67)は朝晩2回測定し、日記に記録する。標準値の80%を下回ると「要注意」。主治医との打ち合わせ通り、薬の量や種類を追加する。2年前の海外出張では前兆に気づいて悪化を防げた。ただ、ピークフローメーターの普及率は1割以下。患者会のNPO「環境汚染等から呼吸器病患者を守る会」では、月1回開く学習会で「熟練患者」らが体験談を話し、相談に乗る。常任理事でもある清原さんは「気管支の状態を把握して体調を維持できることを知ってほしい」と話している。(石倉徹也)